

# ギリシヤ精神のユダヤ

griekenhearted yude

アルトー、ウィットゲシュタイン、  
マルクス

free thinker

# 1 アルトーとケージ

---

アエオロスの避難所—ジョン・ケージのアイリッシュ・サーカス

慈悲深き白壁の宮殿に  
向かっていくこの降下には  
苦い欺瞞がともなう

百万の監視箱にとりかこまれた人々

雲の軍勢が、  
東に指差した超越者の時計台をこえて  
行進する

と、風である、このわたしに、  
激痛がもたらされた

“愛するひとよ、雨粒に撃たれてはいけない”  
と、降下してきた裸の人が告げる  
ここで祈っても無駄  
もっと下にむかって降りていこう

無調の氷のエクシタシーにいざなわれて  
アイロスの避難所のもとに、  
降りていく

文学である避難所のもとに  
ひとびとの言葉の貨幣のもとに  
事物の内在的原因のもとに

魔法である詩の息吹となるのだ

Aeolus' asylum

From the coming down to  
The compassionate white palace  
With fraud, I , crouching behind  
A million surveillant boxes,  
Heard the conqueror of cloud  
A cross a transcendental  
Big Ben  
Pointing to the East

I, wind , felt  
A sudden bloody  
Pain...I lost  
My way?

“ My love , don' t be shot by the raindrop”  
The Nude says

Instead  
Of praying there,  
Keep descending!

Along the atonal glacier od ecstasy,  
I pass to Aeolus' asylum,  
The literature, the coinage of language that  
Ordinary people use in the abyss , the immanent cause of all things,  
And into the breath of magical poetry

バス後部席の背後にある横長の窓は映画のスクリーンのように、走り去るダブリンの街の映像を次々に映し出した。長方形を重ね合わせてできたジョージア朝様式の建物、似通った住宅の単調な色調、どこことなく控えめに並ぶ地味な広告看板、壊れたままで時を刻むことを止めてしまった公衆時計、横断歩道を見殺し車の隙間をぬって強引に道を横切る人々。これらのものが一つ一つ、遠ざかり小さくなっていくのを眺めた。ずんぐりとした体つきで赤ら顔の運転手はカーブの手前だということにさっさとスピードを落とそうとしない。ぎしぎしと音を立てて車中が傾く度に、ばたばたと暴れ回る緑色の昆虫の背中から振り落とされるような居心地悪さだ。

田舎の道の交差点で幾度も見かけたマリアの立像をふと思い出した。野原で摘まれたような白い花束が足下に置かれていて、決まったような青の衣と血のような赤い唇が印象的であった。さすがに首都ダブリンに来るとそういう風景は皆無である。あらためて車窓から眺める往来には位置や方角を示す標識が殆どない。たまにみかける矢印は天空のようなあらゆる方向を向いていたりする。実際にこのダブリンの薄汚れた道は行き止まりだらけで、街全体が容易に一筆書きのできない迷宮になっているのだろう。外国人と思わしき乗客がバス停が近づく度に場所を確認しようと試みているが、運転手は全くもって無愛想の極みだ。彼は黙りこくったままハンドルを切り、バスは急に左へ逸れて脇道に入った。乗客達の表情は皆暗くこわばっているようにみえる。私は振り返り再び後部席の窓の方を見た。

フィルムが突然動くのを止めたかのように窓の映像が静止したと思った瞬間、バスは小さなバス停の前で止まった。ポールの先端に「バス」とだけ記してある円い看板が見えるだけで、地名も地図も時刻表もなにもない。出口できょろきょろしていると、ここはダブリン6丁目だ、という声が後部から聞こえた。

お揃いの赤い帽子を被った双子らしい少女達が私の前をぬってバスを駆け降りた。華奢な細い腕を鉤のようにバス停のポールにぐいとひっかけて、少女達は互いに引き合う連星の如く、仲良くその軸の周りをぐるぐるとまわり始めるのであった。私とジョセリンがバスから降りたとたん、ポールで遊んでいた子供達は母親に手を引かれてさっと曲がり角に消えた。バス停の斜め向かいの小さな教会の敷地を通り抜けると、ジョージア朝様式の古ぼけた建物が幾つか並んでいた。ジョセリンはそのなかでも特に老巧化の進んだようにみえる扉に私を招き入れた。

「ここがルーシーのアパートよ。」

画家である娘のルーシーは共同アパートの五階に住んでいる、と彼女は口早に説明した。真っ暗な玄関ホールは吹き抜け天井らしいが、方角のせいで日中でもあまり光は差し込んで来ない。階段を登り、共同洗面所や浴槽室の入り口を通り過ぎると、緑色のゴミ袋が置いてある扉に辿り着いた。

娘は留守のようだが構わないから遠慮せずに中に入れ、とジョセリンは私を促した。扉に向かい合う縦長の窓が一つきりの屋根裏のような狭くて粗末な部屋である。すっかり色の褪せてしまった壁紙、古くてスプリングの弱ってしまったようなベッド、簡単な調理しかできそうもない不潔な台所、錆び付いた水道の蛇口、そして床に散在した書物が次々に眼に飛び込んできた。堂々と壁に立て掛けられたヴァン・ゴッホの画集の立派さが際立っている。

「そこに水彩画があるでしょう。」

台所でお湯を沸そうとしていたジョセリンが不意に言った。

「神話のアンナ・リビアの裸体よ。」

彼女が描いた絵だという。ジョセリンが指さしている背後を振り返ると、痩せた細長の女性の裸体が横たわっていた。シアンで埋められた背景が裸体の輪郭をくっきりと際立たせている。四肢や胴体は粗雑なタッチでやや乱暴に書き殴られているが、頭部だけは丁寧に描かれているのがなんだか滑稽に思えた。皺が沢山ある顔。辛辣な皮肉と天真爛漫な愛嬌とが分かち難く共存したような独特な表情をしている。よくよく絵を眺めていると、それはジョセリンに瓜二つであることに気がついた。

「このモデルはあなた自身ですね。」

そう小声で私が尋ねるや否や、ジョセリンはちょっと恥ずかしそうに警告した。

「あまり長い間まじまじと見つめちゃだめよ。」

台所からポットを運んできて椅子に腰掛けると、ジョセリンは私の顔を見て唐突に話し始めた。ここでは皆がアメリカ人を真似し始めた、特に最近の若者は国旗にある種の愛着の様なものを感じ始めているが奇怪だ、と苦々しげである。それからちょっと皮肉を込めた調子で続けた。愚かにも国旗をティーシャツにプリントしたりしている者が居る、そのうちアメリカ人や日本人の様にうやうやしく旗に敬礼する輩が出て来るのだろうか。

適当に相槌を打っていたら、ジョセリンがぐっと睨みをきかせた視線を投げかけてきた。今回アイルランドの欧州連合への加盟が決まり、皆それに便乗した商売の方に関心が行っているけど、そのうちきっと北大西洋条約機構への軍事貢献が求められ、挙げ句の果てにこのベトナム戦争みたいにシャノン空港がアメリカの爆撃機によって当たり前のように利用される事になったら大変だ、この国が守ってきた中立が危うくなる、とジョセリンは間髪入れずまくし立てた。「アメリカ」という言葉を口にした時ジョセリンは責めるような眼差しを私に送ると、そのまま不機嫌になり黙ってしまった。

ジョセリンは音を立ててコーヒーをポットからカップに注ぐと、今度は自分の身の上話を静かな声でポツリポツリと語り始めた。夫がアメリカに出稼ぎに行ってそのまま帰って来なくなってしまった、夫からの連絡も途絶えた後は大変に苦労して三人の子供達を育てたが、食べ物が全く無く牛乳のみで飢えを凌いだ日もあった、とジョセリンはたぶん多くを端折った形で短く語った。それから、同じように亭主に捨てられた女達の話や母一人の手によって困難な境遇のもとで育てられた男友達の話等が、次から次へとジョセリンの口から出てきた。

カトリックの宗教画家パトリックはもともとはプロテスタントの信者であり、その母親はバルトークの演奏家達を初めてアイルランドに紹介した程のなかなか教養の高い人物であった。ところが父親は英国で行方不明になり、家事など一度もした事の無い良家出身の母親は当惑と貧困の中で息子を育てなければならなくなった。現在カトリックの擁護者のように振る舞っているパトリックだが、実は彼は若い時分にアイルランドで売れっ子になるためにプロテスタントからカトリックに改宗しただけだと皆噂している。

続いて哲学者パトリックの話。彼に会いたければドーソン通りにあるカフェに行けとジョセリ

ンは言った。孤児であったパトリックは、裕福な養父母に引き取られて育ったが、なにが善でなにが悪かという事を彼に教えてくれる者が周りにいなかったがために、大事な事は全て本から学んだ。その学才を発揮しトリニティー・カレッジで哲学を熱心に学び、ギリシャ語とラテン語の古典の教養を身につけた。同性愛者の彼はオランダ人の若い恋人がいる一方で、友人のアイルランド男性に捨てられて途方に暮れてしまった子連れのアジア人女性と結婚して、その女性と子供の滞在の便宜を図ってやっている。

この二人のパトリックを区別するために私達は画家のパトリックのことを、R.C.Patricと呼んでいる、つまりローマ・カトリックのパトリックという意味ね、とジョセリンは一息ついた。

「寡黙だね、ジョン。ここが窮屈なの？」

ジョセリンはちょっと心配そうに私の様子を窺った。私は咄嗟に返事が出来なかった。アイルランド人の嗜好きは知っていたけれど、まさかここまでとは全く想像していなかったのである。

「宗教画家のパトリック、哲学者のパトリックの話が出ました。3人目のパトリックのことは、私から話させて頂きますか。」

実は私はアントン・アルトーに特別な関心を寄せていた。そのアルトーは聖パトリックの伝説の杖を携えて1930年代後半にアイルランドを訪問していた。どうやら闇市で売られていた古い杖を手に入れ、これを特別な杖と思い込んでしまったというのが真相だったようだが、彼の到来は当時ダブリンでスキャンダルを巻き起こした。意外にもジョセリンはこの事実を知らなかった。アルトーはチベット死者の書、神秘思想、精神分析、人間学、占星術、ヨガ、針等に相当な関心を寄せていたが、当時この国にはこのような神秘家達が沢山いたと聞く。悪戯っぽく眼を光らせ身を乗り出したジョセリンは、アイルランドに来るのはああいう手合いばかりだ、ここへ来ておかしくなるのか、そもそもはじめから狂っていたのか、ハムレットもデンマークからこの国に立ち寄ったばかりに頭がいかれてしまった、と言うと、目を細めて笑った。

それから私達はアルトーについてあれこれと語り合い、時間が立つのを忘れてしまった。と、ジョセリンは台所の方に戻って灯りをつけて、冷蔵庫から野菜を取り出しそれを洗った。包丁で野菜を切り始めたが、それは定規で一本一本線を引くような手つきであった。

「簡単なものしかないけれど、良かったら食べて頂戴ね。」

## 2 アルトーとケージ

「簡単なものしかないけれど、良かったら食べて頂戴ね。」

古く萎びたレタスと不揃いに刻まれた人参の入ったサラダもどきものが入った小皿をジョセリンは私の前に置いた。

「蛇口から流れる水の音ですが・・・」

私はジョセリンの方に向かって言った。

「面白いですね。録音させて頂けませんか。」

ジョセリンはちょっと驚きを示したが、水道料金は無料なのだから構わない、遠慮するな、じゃぶじゃぶ使え、と陽気に笑った。

好奇心一杯の眼差しでジョセリンは録音の様子を見入った。私は小型の収録機をバックパックから取り出して、台所の方へマイクを向けた。録音はほんの十秒ほどのものだった。

その水道音を含めて一週間に行ったという録音はどういうものなの、とジョセリンは私にたずねてきた。テープを少しだけ巻き戻して、私はヘッドフォンをジョセリンに渡した。それは、点滅する信号機のビーム音、街頭を往来する人々の足音、洗濯機のモーター音などといった雑音が録音された予備のテープであった。

ヘッドフォンをひっかけて始めは頗る上機嫌のジョセリンであったが、しばらくすると顔に不快な表情が漂った。ジョセリンはヘッドフォンを外すと、夜中ベルファーストの街を偵察する忌まわしい軍用ヘリコプターの音を思い出したわ、と投げ捨てるように言った。「あそこでは夜誰一人としてじっくりと自分の事を考える事が出来ないのよ。」

彼女は顔を背けて腕を組みそのまま黙り込んでしまった。

あわててバックパックから別のテープを探した。木の枝葉を揺らす風の音、滝や雨や雷の音、マイクを向けられて戸惑った様子の子供達の明るい笑い声等が録音されているテープである。ハーモニカやパグパイプを吹くストリートミュージシャンの牧歌的な演奏も含まれていた。私はテープを交換してジョセリンにヘッドフォンを渡した。彼女はそれを頭にひっつけたが、今度は渋々といった調子である。波の打ち寄せる音、船の汽笛、色々な種類の海鳥の鳴き声等をジョセリンが快く聴いてくれることを期待したが、案の定、今度は眼を閉じて静かに聴いている。

ヘッドフォンを戻すと、ジョセリンは感想を述べた。一体どこで誰が何を喋っているか、いつ誰が歌っているのかといったことが皆目検討つかない、そこに彼方のものを近くに引き寄せる不思議な力が宿っている。

「この録音はなにか特別なレンズのようなものなのかしら。」

ジョセリンは記憶の中の映像をふと語り始めた。

ルーシー達が小さかったため手を引きながらアイルランドの田舎を放浪した頃のことである。昼間でも全然陽のあたらない狭い台所を特別安く借り、その木箱の様な狭い空間にベッドを置いて親子で寝起きしたこと。ダブリンに出てきてオコネル通りで物乞いをしたこと。なんとか授業料を工面してドネゴール州の公立学校でゲール語の文法、修行僧が詩を綴る時に使った古代の言葉を熱心に学んだこと、など。それらは、とても楽しい思い出とは言い難い生活苦の連続といったものであった。

ジョセリンはなにか言葉を探すようにしばらく黙っていたが、悪戯っぽい眼差しで私の顔をじっと見ると、「ユリシーズ」中の挿話「セイレーン」に言及した。オペラ歌手ボイランの後を追うのを諦めて靴紐でノイズの音楽を奏でて遊んでいるブルームは実はジョン、あんたの事だったのね、とジョセリンは急に高笑いした。その時私はジョセリンにとっても暖かい気遣いのようなものを感じた。

「ありがとう、ジョセリン。」

自分の音楽は酷く深刻に受けとめられたり、また逆に冗談のように軽く扱われてしまうのだけ

れど、あなたの意見はその中間を行っていて大変に参考になるものだ、と感謝を述べた。少し照れた様子でジョセリンは呟いた。

「あんたのそのサンフランシスコの訛りにはなかなか慣れないね・・・」

午後六時をまわると、ルーシーが帰って来た。彼女は控え目な感じの小柄な女性であった。黒いコートを入り口にあるハンガーに掛けると、此方に向かってめいっばいといった感じで文句を言った。

「いい加減にしてよ、人のいない間にまた他人を勝手に部屋に上げたりして、本当に困るわ！」  
仕事で疲れていたルーシーは、自分勝手な母親の行動に対して憤り、さらに心底呆れ果てたといった態度であった。その後ちょっとした言い争いになったので、私としてはさっさと退散すべきだと立ち上がりかけたが、意外にも二人に引き留められてしまった。気にするな、喧嘩は日常茶飯事で、実は客人はいつでも歓迎なのだ、とジョセリンとルーシーが口を揃えて言った。どうしたらよいか決め兼ね、ふと窓の外を見ると夜の闇が増していた。くっきりした輪郭の月が雲にゆっくりと引き寄せられている。と、メリエスの映画に出てくる大きな目玉の月を咄嗟に思い出した。ジョセリンとルーシーを通してアイルランドの人達のことをもっと知りたいと思う気持ちが私の中で芽生えていた。彼等の心の奥の方へ向かって一步一步進んで行きたいという思いが募っており、ここで立ち去るのは非常に残念だったので、二人の好意に甘えて私はもう少しだけ居る事に決めた。

床にしゃがんだジョセリンは、ベッドの下のダンボール箱を自分の方に引き寄せ、そこから白い表紙の本を取り出すと、ささやかな贈り物だと言って私に差し出した。それはジョセリンの詩集であった。表紙には詩人としての彼女を証明する星とともに一頭のライオンが描き込まれている。その紋章のようなイラストの上に、「THE ELECTRIC BOLT HOLE」という奇抜な表題が掲げられていた。表紙を開くと初めのページに、「娘オンディーンに捧げる」、とある。図書館司書の長女が自分の為に自費出版してくれたのだ、と説明しながらジョセリンはダンボール箱をもとに戻した。冒頭のページには、小さな活字体で印刷されたウィットゲンシュタインの一文が添えられている。この哲学者が1948年の春から夏にかけて棲んだという小屋はアイルランド最西部に現在も残っており、そこはキラリー湾というフィヨルドで浸食された細長い入り江の突端であり、地図にさえも載っていないような辺鄙な土地だと聞く。私はページを次々にめくり、詩のタイトルを確認した。「To be spoken against evil dreams」、「The blush」、「Greek acrobat」、「Velocity」、「Into the music」、「The gold ring」、「Dreaming, the houri」。私は「The woman laughs in the dark 闇の中で笑う女」という表題が眼に留まり、その詩を数行朗読した。

雨の恩寵を浴びながら

とぼとぼと歩いた、裸足で

気づかなかった

雲の隙間からこぼれた陽光に

地面の若葉が輝いていても

女には掌の骨しか見えなかった・・・

ジョセリンは覗き込んでページを確認すると、顔を上げて詩について説明を始めた。尊敬するフランスの女流作家が撮った映画には、インドシナ半島を徒歩で千キロ横断する裸足の女乞食が描かれていて、詩を創作する上で大事なインスピレーションを得たのであった。その映画を観たかとたずねられて私は首を横に振った。映画には関心があるがあまり多くを観ていなかった。以前

酷いヘビー・スモーカーで上映中タバコ無しで五分とじっと座っていられなかったのである。

「映画の女乞食について、話をもう少し聞く必要があるようですね。」

ジョセリンはこくりと頷いた。

映画の物語には、仏大使夫人ストレットル、その愛人達、それからラホールの副領事と呼ばれる男が登場する。ラホールの副領事というのはかつて自殺を企て鏡に向かって発砲したという噂がある人物で、彼はストレットルの愛を欲していたのであるが、ストレットルに忌み嫌われ毎晩拒まれていた。ある夜頭をうなだれて歩み寄ったストレットルは渋々といった調子で彼に身体を預けた。二人の踊る様子は固定カメラによって長い間捉えられるが、やがてゆっくりとカメラの視野は右へ右へと旋回し始める。ジョセリンは指で方向を示し、目に見えないカメラを水平に動かして私の注意を促した。カメラを旋回させるという実に単純極まる方法で映画は観客が持つ自然な方向感覚を最大限に錯乱した。その結果、誰が喋っているのか、誰が叫んでいるのか、あるいは誰が泣いているのかがさっぱり分からなくなってしまうのだ。

「あんたの録音テープみたいだね。」

彼女は話を続けた。カメラのパンによってグランドピアノ、香の煙、宝石箱、肖像写真、こちらの方を怪訝そうに窺う愛人達が次々に示される。やがてカメラがぴたりと止まると、ちょうど180度反対の角度から観客は二人の姿を再び見ることになる。但し今度は明かりが殆ど無いところで二人が陰鬱に踊っている様子が捉えられ、それは若い恋人と一緒に心中を決意したストレットルの過去を喚起させるショットとなる。次の場面では乞食の狂女が徘徊した道が示された後、夢遊病者のようにふらふらとほっつき歩くラホールの副領事の姿が映し出され、外で呻き叫ぶ彼の声が室内に届くと孤独なストレットルは泣き崩れるようにピアノの上に顔を伏せてしまう。最終的には、男の叫び声、すすり泣き、乞食女の歌声が一つ残らずストレットルの寝室の方向から聞こえてくることになる、という。

ジョセリンの眼が輝くと同時に、はっと気がつき、私がアンナ・リヴィアの絵に再び視線を向けると、彼女は感慨を込めてこう言った。

「The woman laughs in the dark 闇の中で笑う女 とは、インドシナ半島のメコン川に沿って彷徨する女乞食のこと、同時にアンナ・リヴィアであるリフィー川、つまりこの私のことなの。」

詩の話聞いて私はもっとジョセリンの仕事のことを知りたいと思い、どれかもう一つ、二つ気に入った詩を選んで朗読してみたい、と申し出た。けれどジョセリンは困惑した態度で遮り、今此処で読むな、家に帰って時間をかけてゆっくりと鑑賞し、後日感想を聞かせてくれたら有り難いと、恥ずかしそうに言った。

「The Electric Bolt Hole・・・このタイトルは何処からきたのですか、ジョセリン。」

「気に入ったタイトルなのよ。何処からって聞かれても、あたしにもはっきり分からない。そちらの方で好きなように想像して頂戴。」

「なんだかブラックホールみたいな響きですね。」

「そう指摘する人もいるわ。」

「タイトルの下に描かれているライオンの絵は一体何でしょうか？」

「そのライオンはあたしの勇気を表しているの。アイルランドに嵐を呼ぶ勇ましい百獣の王。安眠をむさぼる愚鈍な読者は皆、インスピーレーションの雷に打たれるってわけ。」

「稲妻と言え、フィネガンズ・ウェイクの冒頭のところでジョイスはアルファベット百文字使って雷の音を書き記しています。bababadal・・・といった具合に。雷は新しい時代の到来を告げる音なのですよ。」

「あら、パトリックからその話を聞いたことがあるわ」

「どちらのパトリックですか。画家の、それとも哲学者の？」

「勿論ドーソン通りのパトリックからよ」

私は詩集をバックパックの中に納めると、ルーシーが取り替えてくれたコーヒーを一口啜った。

それから、ルーシーはアルトーの謎解きに興味を示し、話題がそちらに及んだ。アルトーはダニールック界隈をほっつき歩いていたところを拘束されたのだが、どうしてまたダニールックの辺りなんだろう、とジョセリンとルーシーは殆ど同時に問いを発した。その後彼はマウントジョイ刑務所に監禁の身となり、そのままフランスに強制送還され、以降9年間を精神病院で過ごす事になるのである。

精神病院からアルトーは当時アイルランドの首相であったヴァレラに手紙を出している。ヴァレラの名前が出た途端にジョセリンは眉間に皺を寄せて顔を背けてしまった。急に重苦しい雰囲気になった。「奴隷の奴隷」という言葉がジョセリンの口から漏れた後、しばらく二人は黙り込んでしまった。やっとルーシーが、それがジェームス・コノリーがアイルランドの女性達の立場を形容した言葉であったことを私に教えた。ジョセリンが憤った様子で当時の話を続けた。

ヴァレラを始めとする「厳粛な兵」を名乗って来た権力者達は共和国憲法下で農家の女性達を神聖化した。但しヴィクトリア朝の権力が当時の女性達を抹殺したのと同じ差別的なやり方で。女性達の置かれた困難な立場に対する同情の声もある事にはあったが、カトリックの支持を取り付けようとした権力者達はこの問題に真摯に取り組む事はなかった、とジョセリンは語気をあらげた。鼻に皺を寄せ、口をぎゅっとひん曲げ、顔をこわばらせながら、離婚や中絶は憲法上禁止され、また強姦や近親相姦の被害者といえども違法なシングルマザーとされ犯罪者となりマグダレン・ランドリーと呼ばれる特別の修道院施設で警察監視のもとで隔離されてしまう、女達はそこで洗濯などの強制労働に従事しなければならないのだ、と一気に口走った。と、ジョセリンは両腕を組んで急に寡黙になった。憂鬱な溜息がルーシーの口から漏れた。窓の外を眺めていた彼女の唇は僅かに震えたようにみえた。窓の方からバスのエンジン音が響いた。しばらくの間、三人とも顔を背け合ったまま動かずに黙っていた。

「おやすみなさい、ジョセリン。また、明日。」

「さようなら、ジョン。明日、オコネル通りの戦没者記念碑公園で。」

ジョセリンが、ジョイスの家族達が最も経済的に困窮した時期に住んでいた家を明日案内してくれることになっていた。生活が苦しかった時オコネル通りをふらつき、その家の前を通過しながら作家志望の自分を励ましたのだ、とジョセリンは明るい声で言った。そこからほど遠くない所にあるマウントジョイ刑務所も案内してくれる予定であった。

ルーシーが玄関まで見送ってくれた。階段を降りながら、最近母は目立って老け込んでしまった、友達との交流もさっぱり無いのだ、とぼつりともらした。皆が母を少しずつ敬遠するようになったのは、恐らく北アイルランドの監獄での断食ストライキの支援に関わり始めてからなのである。パブで外国人に声をかけては寂しさを紛らす母であるが、話が弾み気に入った人物だと認めると、いつも私の部屋にあげてしまうのだ、と彼女は言った。

「最近はおっぱら辛かった昔の話ばかり。」

少し間を置いてから言葉を続けた。

「でも、今日は、久々に楽しそうな母を見る事ができて良かったわ。少し興奮していたみたい。」

「あなたの絵を是非、今度見せて下さい。お仕事はいつもスタジオでなさっているのですか。」  
怪訝そうにルーシーは私の方をちらっと一瞥した。

「いいえ、絵は描きません。美術大学で理論と歴史を学びました。でも絵は描いていません。母は絵を書かせたがっているの。だから、そんな事いったのね。」彼女は笑った。

小刻みに吹き出すあえぐような笑いであった。

「最近は、お芝居に使う仮面をつくる方に熱中しています。聖パトリック祭になると学校に行つて子供達を教えます。恒例のパレードがありますから。」

「聖パトリック祭のパレードは、ニューヨークで見ましたよ。」

本家でありながらダブリンのものはあんなに規模が大きいのだとルーシーは返してきた。

「アメリカに行ったことがありますか？」

ルーシーは首を横に振った。

「でも、母は一年ぐらいかけてアメリカを回った事があるんですよ。私達が大きくなってから。」

「ジョセリンが？特別な目的があったんでしょうか。」

「さあ、はっきりした事は分かりません。ただの旅だったと思いますが・・・この国の人達は皆、なんらかの形でアメリカに縁があるんです。ここから沢山の移民が出ましたから。」

私は玄関口のドアをゆっくりと開けた。すでに辺りは真っ暗だ。

うつむいていたルーシーが、急に私の方を向いてきっぱりと言った。

「一度だけでいいから、アメリカへ行ってみたいと思いますのよ。」

私が何か言うのを制して彼女は声を落として呟いた。

「母には内緒ですけど・・・」

それから彼女は話題を変えた。

「お仕事の方は順調にはかどっていますか。」

私は「ロアラトリオ Roaratorio」の構想をルーシーに語った。大抵の芸術家は7、8、9・・・と数えて一つの方向に到達する希望を持つのだけれども自分の場合はサティの音楽みたいにゼロから跳んで次は1 1 2、2、4 9・・・その次は誰も予測出来ないのである。アイルランドが舞台であるジョイスの本には、数えてみると2 2 9 3個に及ぶ多種多様な音が記述されている。今回ここを訪ねたのはそれらの音を片っ端から録音する為で、中国の占いである易経を利用して録音の旅を実行している。200マイル旅して農家の鶏にマイクを向けなければならない事だである。詩の朗唱、民族楽器、二千にも及ぶ音源などを組み合わせると、ジョイスの本は賑やかな喧噪の中にその本領を発揮するであろう。ロアラトリオは相棒のアーサー・カニングハムによってバレーの振り付けが与えられれば、独創溢れるダンスにきっと発展するはずだ。サークルの中心でダンサー達が一人一人自由に舞い、観客達皆がこれをぐるりと取り囲むように座る。オーケストラは海原に見立てられ、同心円の一番外側のところで演奏を行うのである。英国政府による公民権運動弾圧を契機に北ではプロテスタントとカトリックとの対立が激化しており憂慮しなければならない事態なのであるが、首都ベルファーストにアイリッシュ・サーカスの異空間を創造し、和平と共存を願う人々の環を結びたいという計画をルーシーに伝えた。

bababada lgharaght akamm inarronnkonnbronnt onneronnt uonnt hunnt rovar rhounawnskawnt oohoo-  
rdenent hurnuk . . .

小鳥達が舞い降りる動作

フィネガンズ・ウェイクの螺旋

ゼロの静止。微風の接吻の中で戯れる花々。それから空への飛翔

どこに誘われるのか、誰も語るができない . . .

と、何か頬をかすめた様な気がした。足下の水溜まりに、小さな円の波紋が拡がるのがみえた。

「気まぐれを起こしたかな、空の奴。」

「あら、ダブリンにサティが訪ねて来たのかしら？」

ルーシーの薄紅の口紅がわずかに光沢を放った。

私はアルトーが杖をつきつつ彷徨したというダニーブルックの方角を訊いて、玄関で別れた。ルーシーによれば、帰りのバスは5分ぐらい待てばつかまるはずとのことであった。教会の敷地を再び通り抜けてバス停へ向かった。街頭の高い柱の頂から、光をあてた真珠のようなランプが下の道路を照らしていた。

ロアトリオのパフォーマンスのなかで詩を利用するというアイデアがあったが、アンナ・リヴィアであるジョセリンとの出会いによってこのアイデアはより鮮明なものとなった。

ここへ来る途中、バス停のポールのまわりを動いて遊んでいた双子の子供達の姿をふと思い出した。あの子達の動きは実に素晴らしかった。水溜まりの所に、頭で描いた直線を置いてみた。それから、その直線を避けて、ワンステップでそのまわりをさっと動いた。それは螺旋のダンスになった。腕をちょっと拡げ、もう一度低い所から、今度は曲線を落とすようにぐるりとまわってみた。

もうバスを待つことも忘れてしまい、アルトーが最後に辿り着いたというそのダニーブルックの方角へ向かって、私は軽快な足取りで進んでいた。

### 3 アルトー

---

わたしはこの土地をさまよったーアラン島のアルトー

はじまるのはテーブルから、  
椅子のときもある  
靴だったかもしれない  
でも戻って来てしまうのはここ、  
なにもうつらない鏡  
崩壊の静寂さ

わたしはこの土地を  
さまよった

どこにもいた  
けれども、わたしの土地はみつからなかった

It begins with table  
It could be a chair  
It could be shoes  
But I always return  
To this broken mirrors  
A tranquillity of decomposition

Wandering  
Around  
My land,

I can be anywhere in it  
And still not be of it

ジョンが訪ねたルーシーのアパートからそれ程遠くないところにあるダニーブルック (Donnybrook) はもともと13世紀に聖人ブロック (St. Broc) の築いた宗教コミュニティが存在した場所であった。ゲール語の表記におけるダニーブルックの綴りは「Domhnach-broc」となっており、「ブロックの教会」という意味である。13世紀頃から毎年収穫の時期に一週間の間開催された悪名高いダニーブルック・フェア (Donneybrook Fair) の市場はダニーブルックのほぼ中心地にある神聖な墓地に隣接して開かれ、その期間白昼のもとに放蕩、酔っぱらい、喧嘩

など、俗世界を逸脱した醜態が大手を振ったという。こうして後にダニーブルックという言葉は、「乱痴気騒ぎ」を意味する英語として定着する。

ルーシーはダニーブルックへ足を運ぼうとするジョンに言った。ダニーブルックでは画家ブリューゲルやボッシュ達が描いた、農民達の遊戯やグロテスクな狂気が演じられていたといわれ、それらは異形なものに惹かれたシュールレアリストのアルトーの関心をひいたにちがいない、と。一方、ジョンはもうバスを待つことを忘れてしまい、アルトーが最後に辿り着いたというそのダニーブルックの方角へ向かって軽快な足取りで進んでいた。

1937年にアントン・アルトーは、メキシコからアイルランドへ移動した。聖パトリックに伝説の「杖」を返還するという驚くべき口実でもって、アルトーは、仕種とスペクタクルの語彙を最大限に発揮しながら、大量の移民と深刻な結核に直面した厳しい歴史的状況にあったヨーロッパの西端の辺境国を実に6週間、歩き回ったのであった。そこに脈々と息づく神話の世界における神々の様に。彼は「ちっちゃなフランス人」という親しまれた呼び名でもって、アイルランド西部のアラン島にある小さなコミュニティの記憶の中に長い間生きていた。映画史上レンブラントの後継者とみなされ、ドキュメント映画の父とも呼ばれるフラハティ監督が「アラン島の男」の撮影を行った映画史上名高い辺境の島である。しかし、映画「アラン島の男」の中で海をかき混ぜる巨大鮫に一撃のもりを突き刺す勇ましく崇高な現地の漁夫達とアルトーはすべての点において質を異にしていた。

島の若い女性達は、岩の上で何かに憑かれたようににじっと佇んでいる瘦せて顔色の悪いアルトーを、時を忘れて興味深々に眺めた。岩だらけのアラン島は神話の世界では死者の家とされた。彼は大きな石の上に座し、呪文を唱えながら長い間瞑想に耽った。

ko embach . . . tu ur ja bella . . . ur jar bella . . . kou embach . . .

大西洋から島を横切り大陸へと向かう雄壮な雲はまるで疾走する馬のようであり、台座である石の周りをぐるぐると回った。カモメが二、三羽、地に舞い降りた。小さな水溜まりが女達の陽気な笑い声で一瞬震えた。と、その瞬間アルトーは深遠の淵から我に帰り、女達に奪われた聖人パトリックの杖を取り返そうと躍起になった。人妻を追いかけ回すアルトーの不道德な姿にびっくり仰天し、激しい叱責の言葉を浴びせかける者もいて、村中大変な騒ぎとなった。

着た切りのアルトーに同情した親切な村人から貰い受けた帽子と服を身につけ、アルトーはその後首都ダブリンへ向かった。彼はすでに重い麻薬中毒と肛門ガンの鎮静剤長期服用のせいで相当に消耗しており、ダブリンの路上でホームレスの生活を送っている間に警官と争い、不覚にも大切な「杖」をどこかに置き忘れてしまった。この杖の代わりになるものを探し求めて、彼は再びダニーブルック界隈を彷徨した。

緑色の空と赤紫色の山に包まれるダブリンの黄昏は、アルトーをある懐かしい気分に誘った。ウィックローの山々の輪郭は楽譜に書き記された音符の高低のように滑らかであり、親しみを覚えた。この時アルトーの頭をよぎったのは、プロスペローに語らせたシェイクスピアの言葉であった。

墓は、私の命令に従って、そこに眠る者達を目覚めさせ、口を開いてその者達を吐き出した . . . 私の、このような強力なわざによって、だがこの荒々しい魔術を私はここに誓って絶つ、そして天の音楽に頼んで . . . いまからそうするのだが、その美しい調べを聞かせたい者達の感覚に、私のねらい通りに働きかけてもらう事を済ませたら . . . 私は自分の杖を折り、地中いくひろもの深さに埋め、測量の鉛も届いたことのない海の深みに、私の本を沈める事にする。

## 4 アルトー

ダニーブルックの住人達は、アルトーが通りをほっつき歩く姿を好奇の眼差しでもって眺めた。背中を曲げてとぼとぼと歩くその格好は、画家ゴッホが「囚人の環」において描いた青い顔をした囚人達をも彷彿させるものであった。通りに並ぶのは、直方形を重ね合わせてシンメトリーと相似比の造形美で貫かれたジョージア朝様式の建物であるが、アルトーにはその一つ一つの窓が沈痛な棺桶に見えたりするのであった。アルトーは自分の棺を探して一日中野良犬のようにほっつき歩いたりした日のことをぼんやりと思い出していた。間もなく驟雨になったが、彼は歩き続け、とある学校の校庭に辿り着いた。柵を乗り越え校庭の端にある小さな花壇に向かうアルトーの姿は余所者を見逃すはずのない地元の者に目撃されていた。

不審者が侵入したという通報を受けた現地の警官は学校の現場に駆けつけた。校庭の花壇にうづくまって死体の様にぐったりとして動かない男の姿が直ぐに視界に飛び込んで来た。二人の警官はその顔をのぞき込んだ。

「うっ、くっせーな。裸足じゃないか、こいつ！」

たまたまなくなって鼻をつまんだのは年輩の警官の方であった。若い警官が懐中電灯で顔を照らし出すと、痩せこけて陰鬱な表情が浮かび上がり、窪んだ鋭い眼から不吉な鈍い反射が帰って来た。若い警官はしゃがんでアルトーの肩を揺さぶりながら一言一言を明確に発しながら尋問した。

「おい、しっかりしろ・・・具合が悪いのか、どこから来たんだ・・・言っていることが分かるか、名前は？」

年輩の警官の方はアルトーのズボンのポケットをがさつな仕種で調べ始めた。

警官の一人が大きな溜息をついたのが聞こえた瞬間、アルトーはアジア人が喋るかのように自分の名前を”A-RU-TO”と開音節で発音した。しかし、呻くように口腔の奥から言葉を発したので、二人にはその不明瞭な音を容易に聞き取ることができなかった。口がたまたま臭くて、彼らは咄嗟に鼻を摘んで顔を背けた。

「ちえっ、腐ってんじゃないのか。やれやれ、こんな奴の世話しなきゃならないなんて、ついてない日だぜ。」

不平をこぼしながら、さらに胸の内ポケットを探ると、足し合わせても1ポンドにも満たない数枚の硬貨とくしゃくしゃになった紙切れが出て来た。懐中電灯でその文面を照らすと「フランス」や「パリ」という太文字の綴りが確認でき、次に「文学協会」の語が読みとれた。年輩の警官は呆れたように溜息をついた。

「なんだ、おかまのダンス野郎か。」

舌打ちをして、彼は同僚の顔を見た。

「先週ブライアンと取っ組み合いした奴、こいつだぜ。」

しだいに雨の勢いが増してきた。若い警官はアルトーに向かって大きな声で職務質問を続けたが、一向に反応がなかった。

「頭がいかれちまってんだ、奴達、娼婦の文学ばっか読んでいるからこんな情けない有様だぜ。」

軽蔑の眼差しで彼はアルトーを見下ろした。

「毒虫野郎！」

と、追っ払うように年輩の警官はアルトーの顔に思い切り唾を吐きかけた。正気を少し取り戻したようみえると、若い警官は電灯を近づけて、幾分残忍なやり方で顔を強く照らし出した。

その瞳が光の炸裂で切り裂かれたかのようにみえた瞬間、アルトーの意識に現れたのは、フロントライトで照らし出された女の顔のクローズアップであった。銀のスクリーンに映し出された囚われの姿。髪の毛が殆ど丸刈りに刈り上げられており、その澄んだ大きな瞳からは雨粒程の涙がぽたぽたとこぼれ落ちて止まない。

泣いているのは誰だろう・・・僕か・・・島の女達か。

泣いているのはジャンヌ・ダルクであった。

嘗て自分が異端審問官として出演したサイレント映画の場面とその映像が重なった時、アルトーは身体の表と裏がひっくり返ってしまうような怒りを激しく感じ、声を振り絞って激しく叫んだ。

「言葉なんて糞食らえ！」

警官達はその怒りの籠もった地から轟くような声にすくんでしまい、「そこは立ち入り禁止だ」と慌てて警告したが、その時すでにアルトーは凄い勢いで駆け出していた。彼は柵をよじ登り、花壇に植えられた木に向かって飛んだ。必死の思いで木の枝の一つを掴んだ時、アルトーはまるで自分の手を握ったような錯覚にとらわれた。ぐいと頭を挙げ、呪文のように呟いた。捕らえた大木を地中から引き抜こうと、木の枝を掴んだ手に渾身の力を込めた。

妖精カリヴァンの

大地よ

プロスペローの墓である汝よ

マストを立てよ

死と

眠りが

復活するのだ

o reche modo to edire di za tau dari do padera coco

ついにアルトーは阿呆船のマストを地中から引き上げていた。肛門が開き、屁がひねり出た。希望の息吹きで帆が一杯に膨らむと、大いなる旅立ちを祝福する閃光の馬が天道を駆けた。アラン島から渡って来た風が、雲を運び、雨を降らせ、旅立ちの儀式を盛り立てた。刻まれた様に四方に散乱した雲の一つが凄い勢いで海に落ちると、一人の女性の悲鳴がアルトーの身体の芯を激しく貫いたように思えた。嵐だ、嵐が来るぞ。船のマストを今一度強く握り占めると、至福の絶頂の中で、アルトーは自らの生が輝くのを慄然と確信した。

アルトーは窃盗の容疑でダニールック所轄の警察に保護され、そのままダブリンにあるマウントジョイ刑務所に抑留された。約6週間に渡るアイルランドにおける奇怪な彷徨はフランスへの強制送還という形で突然終止符が打たれる事になった。

アルトーにとってアイルランドにおける最後の宿となったマウントジョイ刑務所はそのまま現存しており、囚人達が役者となって活躍する演劇が毎年秋に一般公開される。壁の内側で深い疎外の状況に置かれてしまう囚人達が、いわば演劇という「窓」を通して、外部すなわち社会に向かって自己表現を積極的に行う活動は、特にアイルランドという国において重要な意義を持つ。それはゲール語の禁止をはじめとする十九世紀に過酷に展開した植民地政策の中で、アイルランドの人々が言語の中にある過去の自己の姿を絶えず発明していかなければならなかったという歴史的な事実に通じるのである。

同様にアルトーも、自身の思考を搾取する言葉の権力に対して、その生涯を通して反抗を試みるのであるが、アルトーにとって闇とは言葉が眠る想像力の源泉であった。闇は思考を自己の外へ連れ出してくれる死の魔術であるように思えた。そしてヨーロッパの西の果て、アラン島に辿り着いたアルトーはついに闇で覆われた無の広大な領域を発見し、その暗闇を彷徨うことで思考の宇宙を創り出すことを試みる。しかし、その宇宙は無限を獲得することはなかった。アルトー

は決して神のように超越することができなかった。意図に反して糞便にまみれながら、再び、虚しく、自己の肉体、自己の言葉の方へ帰還せざるを得なかった。結局はアルトーもアイルランドの人々のように、言語の中に囚われた思考に向き合わなければならないだろう。フランスへ強制送還の後、狂人として南フランスの精神病院に収容され、そこで約9年間過ごすこととなる。治療に携わった医師の一人は「異様な誇大妄想と被害妄想をかかえたパラノイア」としてこの「患者」を実に簡潔に記録している。精神病院の監禁から解かれた時アルトーは依然として自分が「魔神の力」に翻弄された犠牲者であり、社会による迫害という無法行為の標的になっていると考えていたという。その生涯は誰にも理解されることのなかった越境する単独者の旅であった。

## 5 ウィットゲンシュタイン

死とエロスと他者

－ ウィットゲンシュタインのミニマリズム

一般的にはあまり知られていない事実だが、一九四十年代にウィットゲンシュタインはアイルランドを訪れ、短い期間滞在している。この短い滞在の理由については、精神分析医になろうとしてトリニティカレッジ時代の教え子であったダブリンの医師を訪ねたとか、文明の汚染と決めつけた英国から脱出したかったとか、あるいは、同性愛者のパートナーと逢い引きするためであったとか、彼の日記や手紙を読み解く探偵まがいの伝記作家によって様々に語られているが、ソビエト行きの時と同様にラッセルの猛反対を受けたという事実の他は、真実の程は定かではないようである。そして、この滞在については、その地で完成した「探求第二部」に対する学術的な関心以外はことごとく葬り去られたかのごとく、忘却の対象となっている感すらある。

しかし、ウィットゲンシュタインはアイルランドにおいて遺書を繰り返し書き、その数は数十にも上るという証言がある。この事実はいったい何を物語っているのだろうか。アイルランドはウィットゲンシュタインにとって、いわば死の島であったのではないかと考えることはできないだろうか。アイルランドは、パスカルが語った、生者に付き添う不可視の死の棺、とでもいうような、目覚めて始めて連れて来られたことを悟る、荒野たる無意識の領域だったのではないかと私は考えている。ウィットゲンシュタインが滞在した西海岸突端のキラリー湾の入り江は、地図を片手にしても場所を確認することが用意でないような辺境地であるが、このことが象徴するように、彼が敢えて選んだアイルランドという場所は、表象の空白とも、非連続的崩壊とも表現できる、いわゆる、死の間隙が刻み込まれた観念、であったのだろう。「奇妙だ、ここでは誰ひとり声をかけてくるものがない。」と呟き、彷徨う孤立した記号となったウィットゲンシュタインの意識に影を落とした死とは、自身を投影する想像の源泉であった。「探求第一部」の序文は、ランダムな中断と継起、そして持続的な反復である思考の形式から成り、文字で描いた風景スケッチといもいえる修辞を多用しているが、この傾向はむしろ「探求第二部」において顕著となり、その文学的な叙述の性格をより適切に示すものであるといえる。私は、想像力を駆使した、小説の修辞として特徴的な、この一人称視点の表現の遊びがアイルランド滞在の間に発展していったことに注目する。例えば、「哲学の全靈魂が言語像の一滴へと凝縮する」とうような、憂鬱でエロティックな表現に触れる度に驚きを禁じ得ないのである。著者の意識の中で、死がそれ自身のエロティックなバイタリティーと昇華によって、ある転倒した悦びに遭遇する時、ラッセルのリアリズムとはまるで異なる、また、実証的な心理学として整理してしまうことも不可能な、幻滅の放蕩、とも形容できる倒錯したエクリチュールのダンスが披露される。ウィットゲンシュタインは掌に落ちてきた雨粒を目に留め、エロスの偶然が死である宇宙の裂け目に向かって落下したことを想像して溜息を洩らしたに違いない。こうして、ウィットゲンシュタインが遭遇したエロスが一体どこから生じたのか、という問いが考察の対象となる。

一人の教授とおぼしき人物とその後を追う白衣のインターン達が列をなして、外来患者待合室までやって来た。彼等はお互い顔をそむけ合い黙りこくったままひと固まりになって歩いた。雨が窓ガラスを小さく叩いている。ウィットゲンシュタインは窓の外をぼんやりと眺めながら、レントゲン撮影室に通じる廊下の端に置かれた黒い革張りのソファに座って自分の順番を静かに待っていた。彼は静かに眼を閉じ、ここアメリカに至るまでの数ヶ月の記憶を辿り始めた。

アイルランド西海岸のキラリー湾に八月まで滞在した後、3、4週間、病気の家族を見舞うためにウィーンに滞在した。十月にはケンブリッジへ戻って原稿の口述を行い、翌月に再びアイルランドを訪ねた。ダブリンにて嘗ての教え子である精神科医を訪ねた後、再びキラリー湾へ向かうつもりであったが、ホテルの最上階の部屋が秋の終わりの柔らかい陽の光に溢れて思った以上に快適であった。日照時間が極端に短くなる冬に至るまでのかなり短い間にいわば哲学の「乾草」を造る、そう決めて予定を変更し、結局その冬は西海岸へは行かずダブリンのホテルで執筆を完成させる事になった。

ダブリンでは強度の貧血と診断されたが、当時癌が相当に進行していた疑いもあり、翌年アメリカへ渡った時には絶えず死の影が付きまとった。ヨーロッパの人間である事を強く自負していたウィットゲンシュタインにとって、アメリカで死ぬ事は全くの不本意であった。アメリカの病院で友人の一人に打ち明けて、彼はヨーロッパの地で死にたいと強く望んだという。

看護婦に呼ばれ、立ち上がったウィットゲンシュタインは、やはりヨーロッパに帰ろう、ここでは死にたくない、今月にもロンドン行きの渡航を手配するのだ、と決意した。レントゲン室に向かってゆっくりと歩きながら頭の中によぎったものは、嘗て放浪したノルウェー、アイスランド、アイルランドの風景であった。中でもアイルランドは最初の遺書を作成した特別な場所であった。そして、キラリー湾の入り江で遭遇した男との出会いは誠に奇怪だった。あの男は実に雄弁で、いま思い返せば、一種のカリスマすら備えていた。レントゲン室のドアの前で、立ち止まり、天井を見上げな

がら、ふっとため息をついた。

アメリカの探偵小説が机に高く積み上げられている。それらは気分転換の為に読み耽った本であった。早い時間に就寝したが、夜の眠りは安らかなものではなかった。身体が冷え込む度に眼を覚まし、掌を暖炉の火にかざして暖めた。そういう時は暖めた牛乳を少し飲むに限る。友人に宛てて手紙を書いたりするうちにいつのまにか眠ってしまう。キラリー湾に到着して数週間が過ぎていたが、そこでウィットゲンシュタインは色々な種類の海鳥を観察した。今朝はアザラシさえも見かけた。フィヨルド発生当時の自然の荒々しさを現在に伝えるかのように、氷河の運動によって激しく削られてできた細長い入り江はその岩崖に太古の傷跡を無数に残していた。海風と砂埃とで薄汚れた羊達が点在している。微動だにせず、いつまでも同じ場所に佇んでいる。呑気なものだ。羊とその世話をする羊飼い、両者の間にあるものは不動性によって結びついた名づけようのない一種の霊的交流なのだろうか。当時行った執筆は風景スケッチのようなもので、外部世界の映像を一つ一つ、いわばアルバム本の中に整理するような作業であったが、興味深いことには、ぼんやりとした動きの方がいつも記憶にははっきりと刻まれるということであった。逆にあまりにもはっきりとした動きというのはかえって朦朧としか記憶に残らない。強い印象と弱い印象、記憶として持続する印象と足早に過ぎ去る印象、心の中を通過する多種多様な映像の流れの一つ残らず書き記すことを試みていた。

石を積み上げてこしらえた小屋はフィヨルド湖の湿地に隣接していて、小さな正方形の窓が一つあるだけで、太古の海底に立つ墓標のようにさえみえた。ウィットゲンシュタインは入り江で逍遥する自分の姿を魚に託して想像した。あちらこちらで曲がり、あちらこちらで逸れ、ぐるぐると回って、銀灰色の海の中を彷徨う魚である。ノートを開いて文字を記した。雨粒のせいでインキが少しだけ滲んだ。空には暗雲が覆っていた。哲学の全領域はこの一滴に凝結するのだ・

・この崇高な観念に彼の魂は震撼した。

しかし、様々な雑音から逃れるために決意してやって来た、この大西洋に面したヨーロッパの最西端の入り江においても、執筆は順調にはかどっているとは言えなかった。果たして自分は大学を離れてしまうべきだったのだろうか、教職を続けているべきではなかったろうか、と何度も自問した。あのまま教えていくにはそもそも無理があった、もっと早く辞職すべきだったかもしれない、というように自分を納得させたりもした。哲学的な才能がいま枯渇したとすればそれは不運であり、やむを得ない事として諦めるべきなのであろうか。いやそんなはずは絶対に無い。ウィットゲンシュタインはペンを置いてラッセルの助言を思い出した。ラッセルは彼が再びケンブリッジから離れる事に対して断固反対した。しかし、ウィットゲンシュタインは、自身の思考を、生と死を、性を、アイデンティティーの全てを、ラッセルが到達出来なかった未知の境界の彼方に置いてじっくりと見つめたかった。大きな犠牲を払ってアイルランドに来たのは、イギリスでの西欧の中心に縛られて来た立場が解放されると思ったからではなかったか。ウィットゲンシュタインには、ラッセルが執筆した自身の著作「論理哲学論考」の序文が心底不愉快であった。そこには、階層や体系、意味作用の全体、という安定した表象の中心に向かうプラトニックな強迫観念、いわゆるヴィクトリア朝帝国の腐臭というものがいやらしくこびりついていて、貴族出身のラッセルは、本来的に狩猟人なのだ。結局彼は鳥籠の中にウィットゲンシュタインの本を置いて鍵を掛けてしまった。これには心底我慢がならなかった。いかなる哲学にも鉄格子は要らないのだ。あのチェコの若い数学者はこの籠を壊して鳥を逃がすことを試みたが、ウィットゲンシュタインは、捕獲されたことがない野生の鳥達、すなわち人間の思考というものを直接に自分の眼で観察し記述することを決意したのだ。

と、ウィットゲンシュタインは天井を見上げると、ジオットが描いたような羽をいっぱい広げたずんぐりとした天使がバタバタと目の前に降りてきて、いつものように耳障りなメッセージをウィットゲンシュタインに説くのであった。「識別不可能なものは同一である、と主人は語りました。この原理に基づいて同一性を定義せよ、と命じておられます。よく聞きなさい。つまり、XとYとが同一であるとは、Xのもっているすべての性質を、Yも持っていることである、と。あなたは、対象の同一性を、記号の同一性で表現できるのです。迷うことなく、等号「=」を使うのです。これが主人からのメッセージです。」

「馬鹿な戯言だ！」ウィットゲンシュタインは、すぐさま切り替えした。

「二つのものについてそれらが同一である、と語ることは全くナンセンスです。あなたの友人であるズピノザも、「自然において同一の対象に二つ以上の実体は存在しない」と指摘しています。それからまた、一つのものについてそれが自分自身と同一であると語ることは、やはりなに事も語っていません。自己同一性「 $X=X$ 」をもって「思考の対象が存在する」ことを表現しようとするのは、大変ばかげたことです！そんなことを認めたら、巨大な怪物が人々の幻想の中で徘徊し始めます。親戚のハイエクも、この類の全体主義の妄想をいつも大変危惧しています。あなたの主人は、相異なるものを同一化するという狂気に陥っているのです。」

「ウィットゲンシュタインよ、あなたの方こそ、同一のものを互いに異質であるとみなす狂気にとりつかれていませんか？」と、天使はウィットゲンシュタインに問いかけた。

「お黙りなさい！等号の使用は馬鹿げているだけではなく、大変危険な認識です。例えば、ドイツ人=オーストリア人、という妄想から、決して、ドイツ人=ドイツ人という自明を装った帰結に辿りつきます。こうして、自己同一性の等価式から、オーストリア人が追放されてしまう危険があるのです。ドイツ国籍を拒んでウィーン人として主張を通したフロ

イトは、失意の中で亡命を余儀なくされました。」と、ウィットゲンシュタインは、断固として天使の問いを退けた。すると、天使は、「ウィットゲンシュタインよ、あなたはウーン人を主張したいのですか？もともと、あなたはユダヤ人だったではありませんか？あなたの親はどんな人達だったのですか？」と、聞いてきた。

「ウーン人？ユダヤ人？分かりません。親の事にはもう関心がありません。そもそも現在私の視野には、オーストリア人も、ロシア人も、イギリス人も存在しません。この土地にはアイルランド人の姿すら見えません。確かに、ダブリンに居た時は、私に向かってユダヤ人と指差す者もいたのですが…。困り込まれた土地みたいに、集合の表彰として、ウーン人やユダヤ人というような実体が映像で現れてくるということはないのです。ここで私はいつも一人ぼっちで…」と、ウィットゲンシュタインは、次第に自分自身に話しかけるような調子で言葉を詰まらせた。

「ウィットゲンシュタインよ、ひとりぼっちではありません。その証拠に、あなたは、この私の姿をちゃんと見ているではありませんか。あなたは自分の中の自分という自己同一性を否定しました。確かに、あなたが感じ取っている眼差しは、自分自身を見つめる自己からの視線ではありません。確かに、他者が、あなたのことを見ていることになります。私が、その他者であるとは思いませんか？私は見つめる本なのです。言葉であるウィットゲンシュタインよ、喜びなさい。言葉は、見つめる本からの眼差しをいつも感じとる能力があります・・・そして、あなたは言葉自身として存在していたのです」、と言うと、天使は机上の読みかけたトルストイの本にそっと触れた後、忽然と姿を消した。

ウィットゲンシュタインは自問した。「文学は、言葉である私の方をずっと見ている・・・？とすれば、この私は、文学から誕生した子供、批評のような言葉として生きてきたのだろうか？」

ウィットゲンシュタインは唯一ある小さな窓へ向かってゆっくりと近づき、外の空気を取り入れるためそれをゆっくりと押し上げた。その途端、湖畔の小鳥達が一斉に羽ばたいて飛び立った、と同時に耳をつんざく様な車のクラッシュの音が飛び込んできた。速度を上げた黄色いバンが平衡を失い、狭く曲がりくねった道を脱線し、どうもそのまま直進して小屋の前の植木の一つに衝突したようだ。煙を吐いている車から上背のある男が慌てた様子で出て来て、ボンネットを開け修理を始めた。助手席には女性とおぼしき人影が見えた。車の屋根には沢山の荷物を載せている。ウィットゲンシュタインは小屋から飛び出し、事故の現場に駆けつけた。鮮やかな緑色の靴下が人目を引くをはいた初老の男は、せわしげに現場を見渡すと、車に向かって怒りの言葉を放った。

「畜生！このボンコツ車め・・・ちょっと、あんた、悪いが少し手を貸してくれよ。標識も何一つ無いこんな狭い道じゃあ、事故も日常茶飯事さ。そして、西の果てしなく続く酷い荒地地ときたもんだ。」

「わあ！何て事だ。植木が滅茶苦茶じゃないですか。」と、ウィットゲンシュタインは抗議の言葉を男に向かって放った。

「道が狭くって急にこの雨だろう、視界が悪かったんだよ。ほとんど真っ暗ってもんだ。あ、失礼、車に居るのは女房のアイリーン。え・・・あんたの植木だって？この村じゃ見かけない新顔だね。」と、男は好奇心を示しながら聞いてきた。

ウィットゲンシュタインは男を睨み付け、「酷いじゃないですか！」と吐き捨てた。

すると、その男は僧侶が経を唱えるように、何かの名前のような言葉を一つ一つ、バンがぶつかった木の前で朗読し始めた。それらは反復する類似音で構成されているようで奇妙な響きを持っていた。ウィットゲンシュタインは、世の中にこれ以上いかがわしいものは無いという顔つきでその様子を眺めた。さらに歯が半分程も抜けている男の口もとも何かしらいかがわしさを増幅させた。残っている歯も全部、まるでアイルランド西岸の険しい崖みたいに削られて、黒くぼろぼろである。一方、男の方は、ウィットゲンシュタインの眼差しに気づき、声を一層抑揚させマリア像の如く両腕を大袈裟に拡げたりした。しかし、腕の関節はその声の勢いに反しぎくしゃくとしか動かなかった。ウィットゲンシュタインは今度は男の指先が気になった。黒く汚れて伸びてしまった、ギザギザの不潔な爪。男はウィットゲンシュタインに再び訊ねてきた。

「ところであんた、こんな辺鄙なところに一人で居て不便じゃないのかい。」

「そんなことはありません。ウィックローの村では声をかけて来る者は皆無でしたが、ここでは泥炭を運んでくれたり牛乳を届けてくれる者が居ます。」

「とはいっても一人じゃ厭だろう。奴らは、よそ者に対する猜疑心が強いからな。」

いつの間にか辺りは暗くなっていた。暗雲が空一面を覆い始め、見渡す限り周囲の丘陵はレントゲン写真のような影に変容し荒涼たる自然の原型をむき出しにしている。ウィットゲンシュタインは男とこれ以上会話を続けることを無意味に感じ、黙って男の様子を窺った。男は眉を顰め、堅く口を引き結んでいる。と、片手をポケットに入れ、ウィスキーの小瓶を取り出すと、キャップを外し酒を少量注いでぐいと一口で飲み干した。瓶をポケットに戻すと、息を整えてウィットゲンシュタインの顔を睨み付けて、強い語気で言い放った・・・。

さて、こうして、ウィットゲンシュタインの純粋な内部意識だけを描こうという試みが行き着く先は、キラリー湾の黄昏であり、薄暮の中に浸っていくものはアイルランドの夜が沈めるものの残響として、不可視の中に無限に拡散していく。私のウィットゲンシュタインが存在したのは、正にこの様な暗闇の内部においてであった。その思想や眼差し、そ

して、言葉や行為だけを描写しようと、想像の中で、彼の額、目、口、手を、手探りするかのごとく、断末の死の方向へ傾いた頭とからだの量感に結びつけてみようとした。しかし、彼が滞在したキラリー湾の入り江で写真を撮ろうとした時に覚えた強い困惑にも似て、ウィットゲンシュタインの意識を描こうとする意図のうちに、私は自失茫然としてしまった。露出も深度も定められず、どのような写真を撮りたいのか全くわからない。ちなみに、哲学好きの読者は、アイルランドのキラリー湾を、物自体として、すなわちあたかも超感性的な領域として思い描くかもしれない。それは、無辺際にして、しかも近寄りがたい土地であった。しかし、その土地は実際は、カントが語るように誰も所有し得ないような土地だったというわけではなく、住民、すなわち他者がウィットゲンシュタインの近傍に存在していたことを書き留めておきたい。

哲学者の仕事は壺の中に迷い込んだ蠅を逃がしてやること、と、ウィットゲンシュタインが（おそらく）憂鬱な溜息の中で洩らしたように、所詮、小説で可能なことは、その壺の出口に目印として立って、他者の声を書く、ということぐらいしかないのかもしれない。死の島の中に迷い込んでしまった主人公をそこから脱出させるには、一見つじつまの合わず、滑稽かつ些細な言葉の断片であるとしても、エロスである他者が発する声の領域の方へ一歩一歩と歩ませるしか方法がないのである。絶え間なく死に隣接した不在の空白に打ち震える一方で、偶然の恩寵たるエロスの粒をアイルランドというキャンバスの上に散布させること。ウィットゲンシュタインの憂鬱なミニマリズムは、こうして極まるのである。

「資本論」、解釈を「書く」欲望

最近は何のこともなくともめることが多くなった。自分達が死んだらどこの墓に葬られることになるんだろう、という考えが一日中頭を巡り離れない。以前は漠然としていた不安がだんだん確固たる脅威の如く大きくなっていく。最近通い始めたシナゴグのあるゴルダースグリーン共同墓地に埋葬されることになるのかしらん。

しかし、この共同墓地への埋葬についての想像は決して心休まるものではなかった。このようなことに関して常に無関心なkは、いつも決まって、「知らないさ」とつつけんどんに答えるだけで、ハムステッドの林の反対側にある市営のハイゲート・パークの墓地に墓を立てるつもりだ、と、気乗りのしない風にその場のとりつくろいのことばを言ったりする。

「私達ユダヤ人にもその市営墓地を利用する権利があるのかしら？」とジェニーが聞くと、「ユダヤ人だって・・・何のことだい？」と、露骨に不快な表情を示し、声を荒立て「そもそも、そんなものは同化政策に反発を覚える移民達が頭の中ででっち上げた幻想さ。シナゴグとか、神聖なヘブライ語とか、ユダヤ人のコミュニティとか、何もかも根拠の無い幻想に過ぎないんだよ」、とジェニーを嘲笑う。

「ラビであるあなたのお父様は？ユダヤ人の両親によって祝福されたこの結婚はどうなの？やはり幻想なのかしら？」と、ジェニーはkに擦り寄ってみるが、返事はない。ただ、市民権取得の資格審査が行われた後に、夜遅く帰宅したkが「とんだ茶番だ！」と大声を出した日だけはいつもと様子が違っていた。kには日頃から国籍の取得に強い抵抗があった。

「女王とか国民性（Britishness）の観念を無理やりに押しつけようとする連中には、ユダヤ人がもともとヨーロッパの民族じゃなかったという事実をよくよく考えてもらいたいものだ」、とまくし立て、「そもそもモーゼはエジプト人だった。砂漠を放浪した後ユダヤの民と称するようになった人々が生きるのは、北アフリカを舞台とする歴史じゃないか」、と誰に言うともなく言葉を吐き続けた。不当な同化を強いられ反発したアフリカやアラブ系の若者の中からは、地下鉄やバスを爆破したり、学校の校舎や車を焼いたりして暴動を起こす者が現れたが、今夜は、自身の声を自身で代表できない若者たちの怒りと不満が痛いほど理解できる、とも言った。そして、「彼らと僕たちの間にはほんのわずかな距離しかない」、と結んだ。ジェニーはこのように民族のアイデンティティーのことを自明として語るkの言葉を幾分当惑を持って聞いた。というのは、コスモポリタンの亡命者を自負していたkにとって、国境という観念も民族という観念も存在しなかったはずであるから。

「あら、ユダヤ人は幻想じゃなかったの？」と、ジェニーは問いかけてみた。

「もしエジプトから出発したモーゼが本当に祖先だとしたら自分たちの起源はアラブ世界だったことになるけど。」

この疑問に苦笑したkは首を横に振って、グラスに注いだワインをぐいと喉の奥に流し込み、「まさか、アラブって事はないさ」と、軽蔑の口調で言った。

「じゃ、何よ？」と、ジェニーはグラスを取り上げて詰めた。

「昔からユダヤ人は地中海の端に存在した小民族だったんだ」

「地中海ですって？じゃあ、ユダヤ人はギリシャ人やスペイン人やポルトガル人みたいにヨーロッパ人だということになるわ。なんだかはっきりしないわね！ユダヤ人はヨーロッパ人なの？それともヨーロッパの外からきた民族なの？いったいどこから

来たのよ!？」

「ドイツだ。ベルリンだよ。中世のスペインやポルトガルのイベリア半島で黄金時代を築いたように、ドイツで皆、一緒にうまくやっていたんだ。ここイギリスよりもずっとずっとうまくね。」

このあとkは沈黙に陥り、このような質問に答える時は拷問を受けているような苦しい気分になる、と言わんばかりに、深いため息をついた。明晰な判断を重んじて自分を子供扱いすることの多い日頃のkの姿と比較して、首を横に強く振った後、茫然となって椅子の背もたれに寄りかかっている目の前の様に、ジェニーは滑稽の念さえ覚えた。また、ロンドンでの長い亡命生活のせいでkは随分と変わってしまった、と思った。そして、このジェニーの感慨は、そのままkの仕事に対しても当てはまった。近頃のkの理論からは、皮肉を効かした独特のレトリックのうちに透徹した論理を木霊させる確信、というものが姿を消していたのである。

小説「マルクス、未来を思い出すゲーム」の中でkとして描かれているカール・マルクスは、抵抗としての距離を確保したい、と常に欲する人物である。その結果、ルイ・ボナパルトのフランスやヴィクトリア朝のイギリス、ビスマルクのドイツの全体主義の帝国の囲い込みから絶えず逃れて移動することになる。イギリスに逃れて来た時点で、現実的には移動を続けることは困難になってしまうが、そこでも市民権取得の為の女王への忠誠を拒むことによって、なんとかこの距離を確保したい、と考えた。結局、いざという時のための出国手続きを容易にすることを理由に、忠誠を示して市民権を得たが、小説の中では、ハムステッド・ヒースの林の中に頻りに姿を隠すことによって、子供の遊びのように、亡命を演出する姿が描かれる。マルクスが演じたこのような亡命ゲームは、フロイドの立場をも喚起させる。フロイドは、オーストリア・ハンガリー帝国のなかで地中海の異邦人たるユダヤ人の立場を頑固に堅持し続け、コスモポリタンとなったウィーン時代にはナチス・ドイツの国籍を拒んだ。最後にエジプト王国のようなイギリスへ亡命を決めた際には、「出エジプト」のモーゼが指差した非ヨーロッパのアイデンティティーに強く惹かれた。

小説の中で、ジェニーとエンゲルスの二人は、マルクスがパリから亡命してきた仲間たちと一緒に散歩を楽しんだハムステッドヒースを、日課として歩き続ける。晩年、身体の衰弱で家に籠もりがちであったマルクスは、いつか世界漂流に終止符を打たなければならない日が来ても、超越した思考の旅は永遠に続くだろう、と考えていた。かつて、ハムステッドヒースを散歩していた時、農民の共有財産であったこれらの土地の歴史について思考を巡らせたことを思い出す。「コモンランド」と呼ばれていた、このような共有の土地は、近代に入って勃興するブルジョアジーによってことごとく囲い込まれていき、ついには議会の承認のもとに強奪されてしまう運命にあった。追放されてしまった民衆のうち、ある者は飢餓で死に絶えてしまい、ある者は都市に行き工場労働者として雇われて貧困を再生産する生存を強いられた。結局、これは、今日、周辺国（あるいは先進国都市の周辺地域）が多国籍企業によって収奪されている構造を先取りしているのであるが、マルクスは、過去の歴史だけでなく、現在私たちの元にある未来についても思いを馳せていたのである。小説の最後は、病床において未来を思い出すマルクスの姿を描き、その言葉を綴っている。「ハムステッドには全体を俯瞰する正確な地図が無く、なんども道を失ってしまったが、そんな中でも闊達な議論が僕らの間に常に存在した。教条主義的なマルクス主義の世界観なんか存在しなかったし、僕はマルクス主義者とはなんの関係もない。ハムステッドヒースを一緒に歩いた仲間達は皆、既存の世界の解釈に従ったことはなかったんだ。そうさ、僕らは道に迷う度に、新しい解釈を創造していたんだ」。正に、この言葉どおり、ハムステッドヒースを歩いた人々は皆、世界の解釈を作る欲望があった。つまり、マルクスの想像を遥かに越えたところで、そのパートナーであったジェニーもそのような強い欲望を持っていた、という事実は一考に価する。

ジェニーはドイツの貴族出身で、亡命したマルクスと一緒にロンドンにやってきた。彼らは、始めロンドンの市中のソーホーに住んだ後、ハムステッドの広い住居へ移った。ジェニーは、悪筆で判読不能なマルクスのドイツ語の原稿をくまなく清書する役目を負っていた。エンゲルスは、これらの原稿を買い取ってマルクスの英語訳を行った。ちなみに、マルクスの原稿を清書するジェニーの姿は、ジョージ・オーウェルの原稿をタイプした妻の姿を思い起こさせるが、こうした、内助の功とも呼ぶべき関係はブルジョア的作家において別段珍しいことではなかった。ただ、ジェニーが置かれていた環境は、一見平凡なブルジョア的家庭を装っていたが、彼女とエン

ゲルスとの間には異性愛の関係があっただけでなく、夫のマルクスとエンゲルスとの間にも同性愛の関係があったので、オーウェルの妻の環境と比べると、ずっと複雑な様相を呈していたといえる。とはいえ、夫マルクスの清書を行うという妻ジェニーの立場は、その点に関してのみえば、ブルジョア作家の妻の立場と全く異なるところが無い。清書の作業を長年に渡って引き受けた、このジェニーの影の力は、天才の業績を伝えるメッセンジャーによる「人類への貢献」、というような美化された陳腐な修辞で語られがちであるが、このような見方は、ジェニーとマルクス、そしてエンゲルスの中に存在した意義深い関係を捉える上で何の意味をも持たない。

さて、ジェニーがマルクスとエンゲルスとの間で取った、この意義深い関係を考察するに際して、ウィリアム・フォーサイスが振り付け、演出した舞台作品である「気象学に関する三つの事例」の第二幕における母親とアラブ人官吏（＝翻訳者）の関係を監察してみたい。戦時下の混乱で若い男が逮捕される第一幕の後、第二幕では、息子が不法に逮捕されたことを訴える母親とそれをアラビア語に翻訳して記録を執る官吏（＝翻訳者）とのやり取りが描かれるが、時間の経過とともにそのやり取りは混乱を極めていく。官吏（＝翻訳者）の言葉が、自身の意図を全く伝えることができないことを理解するに従い、母親の疎外感は募っていく。母親は「私の息子が逮捕された」と自国語で叫ぶが、アラビア語で報告文をタイプする官吏（＝翻訳者）の言葉は、自身の言葉を聞くようにしか、これらの言葉を聞くことができない。官吏（＝翻訳者）は、文法の誤りを繰り返し指摘した挙句、母親が全体の客観的な状況を説明できていない、と厳しく咎める。そうして、官吏（＝翻訳者）は、この母親の姿を受難のマリアの姿に重ね合わせてしまう。こうして、言葉の不自由から身体的自由がままならなくなった母親は、拷問を受けた時のような苦痛と絶望の声を漏らし始める。（もちろん、観客は、この設定を逆にすることによって、アラブ人（の母親）と西側ジャーナリズムとの間のディスコミュニケーションの状況としても解釈することを要求されるであろう。） 官吏（＝翻訳者）の言葉は、意味と非意味の間を機械的に往復するだけで、結局、自分の狭い視野のなかで母親を情報の客体にすることにしか関心がない。ここには、母親が主体となる望まれたコミュニケーションは成立することはない。

## 7 マルクス

さて、小説「マルクス、未来を思い出すゲーム」を読むと、ジェニーの立場が、この母親の立場と類似していることが理解できる。そして、この場合、パトロンの存在であるエンゲルスは官吏（＝翻訳者）に対応している。母親が官吏（＝翻訳者）に対して疑念を抱いたように、エンゲルスがマルクスの言葉を、自分に都合がいいように解釈を加えて英語訳をすることで恣意的な編集を行っている、とジェニーは疑い始める。小説の中では、エンゲルスすなわち翻訳者は、自身の言葉を聞くようにしかジェニーの言葉を聞くことができない。エンゲルスはジェニーからの抗議を無視するだけでなく、文法の誤りを繰り返し注意したあげく、ジェニーこそがマルクスの原文を勝手に書き換えている、と非難し始める。更には、ジェニーによる落書きや詩、意味不明のサインで汚されてしまった原稿を、自分の主張の確固とした証拠として、マルクスの目の前に突きつける。これに続いて、猜疑心の応酬なかで、ジェニーとマルクスとの間に激しい口論が起きる。

「最近のあなたの原稿には女の身体を表す言葉が頻繁に使われているけれど、それっていったいどういうことなのかしら？」と、ベッドから離れたジェニーは外からの光を避けるようにカーテンをひいて、その隙間から漏れてきた僅かな光で浮かび上がったkの身体の輪郭を指でなぞった。腕の外側から手の甲まで人差し指を立てるようにして辿り、指先に至ると自身の指を軽く絡ませた。繊細な羽毛と植物のしなやかさを思い出させる滑らかなフレデリックの肌の感触とは違って、ごわごわとした体毛がまだらに密集する、硬物のような単調なリズムの肌から歓びを見出すことが日に日に難しくなっていた。

時間が絶え間なく流れていくなかで、キャンパスに灰色の絵の具を重ねていくような単調さが、不快感を誘い、意味の倦怠に導く暴力にさえ変化しようとしていた。外側からなんとか言葉の輪郭を浮き上がらせよう、とジェニーは、kに向かって自分の瞳に触れてみる、と囁いた。

kが請われたとおり、ジェニーの閉じた臉に軽く触れると、ジェニーは、「あなたが関心を持っている貨幣には、ぎらぎらと輝く濡れた眼差しがあるのかしら」と聞いてきた。

眼差しだって？それはどうだろう・・・とkは怪訝そうに返事した。

ジェニーは、kの手を取ると、ゆっくりと自分の唇に触れさせた。

と、今度は、「紅のルージュをこぼれるくらいいっぱい塗りつけた唇があるのかしら？」と聞いてきた。身体の官能と貨幣とを結びつける奇妙な問いに、答えに窮していると、沈黙のなかで取った手をそのまま下の方へ降ろしていき、胸の膨らみに強く押しつけた。

当惑するkの力を抗してぐいと引きつけると、手を自分の背後にまわして問い続けた。「胸は？肛門は？黄金の糞便は？」

咄嗟に手を引っ込めたkの慌てた様子に、ジェニーは吐き出すように、「貨幣について書いているあなたの言葉の中には、女の身体を表す言葉が溢れているのよ！」と言った。

「そんなはずはないよ。なにかの誤解だ。貨幣のフェティシスティックなメタファーを書いてはいるけど、君の身体のことについては書いたつもりはない」、とkはぶっきらぼうに答えた。すると、ジェニーはベッドから離れて、机の上のノートを取り上げ、無雑作に開いた頁を彼の目の前につきつけた。乱暴に書き殴られた文字の上には、女の身体と言うよりも、道化の顔、それからペニスや睾丸の形をした幽霊や亡霊の顔がいくつも描かれていた。

「それらは王の身体のメタファーで、ただのいたずら書きだよ」、とkはジェニーの意図を解せないまま軽く溜息をつき答えた。

「そうね、お金を運んでくるフレデリックが貨幣なんだわ。彼が私達の王よ。これ

って、みんなあの人の顔なんでしょう？」、と自分の答えに少し興奮気味にジェニーは聞いてきた。

「フレデリックは、ただ僕に金を払っているだけさ。」、とkは落ち着きを取り戻して言った。「彼は貨幣でもなければ、王でもない。そして、金は労働の対価としての報酬で、権利なんだよ」、とつけ加え、両手を軽く上げて掌を向けて反論の身振りをしながら、言った。「つまり、僕の前稿に、労働時間に、精神労働に対する、ってわけだ！」

「それじゃあ、原稿を書き写している私の労働に対する対価でもあるってことね。でも分からないのは、あの人が本当は何の労働に対してお金を支払っているつもりなのか、ってことよ。もしかしたら、わたしの身体、いえ、あなたの身体に支払っているのかもしれないわ。いえ、家政婦のヘレンの身体ってこともあり得るでしょう。」そして、悪意の混ざった調子で、「いいえ、あの人が欲しいものは何かもっと別のものなんだわ」、と暗示的な言葉をつぶやき、考え込むような表情を示した。

「別のものって？」

「暗闇。フレデリックには闇が必要なよ。あなたから暗闇を買おうとしているんだわ。暗闇は自分の内側にうごめく殺戮の欲望を隠すためのもの。あの人には暗闇が必要なんだわ」

「たいした想像だが、誰がその手にかえられるっていうんだい？」、とkは呆れて聞き返した。ジェニーは声をひそめて言った。「父親・・・工場主であり、憎むべき支配者であった自分の父親よ。」

この言葉を聞いたkはぎょっとしてしばらく黙っていたが、やがて、このような支離滅裂な話はもううんざりという風に、今度は、ジェニーに対して責めるような口調で質問を始めた。

「今度は君が僕の質問に答える番だよ。そのフレデリックから君の清書に関して妙な事を聞いているんだ」と、ベッドから立ち上がり机に近づくと一番上の引き出しを開けて、一冊の本を取り出し、そこに挟んであった数枚の原稿をジェニーの前に差し出した。

「彼は、君が原稿に勝手なことを書き込んでいると以前から不平をこぼしていたけど、これを見るまで彼の話が信じられなかったんだ。でも見てごらん。この落書きはいったい何のつもりなんだい？これじゃ、世紀の論文も、とんだ贗金造りってもんだ！」と声を震わせた。kは顔を背けたジェニーの腕を両手で掴み、身体を激しく揺さぶった後、荒っぽい手つきで再び原稿を取りあげ、威圧した調子で読み始めた。

「『貨幣は一般的な等価形態だから貨幣とされるのではない。逆である。貨幣は貨幣である、この事の故に、貨幣は等価形態となるのである。王は皆の承認によって王の地位につくのではない。逆である』ちょうどこの文の下に君が残した落書きがある。僕はね、ここに『王は王である、それゆえに、王は皆の代表となるのだ』と書いたはずなんだがね！ところが、一体なんのつもりでこんなことを勝手に書き込んだんだい？『I do not afraid of my subjects ! TOOFEED ! BIZDA, BIZDA, BIZDA』。いったいこれはどういう意味なんだい？何が言いたいんだ。この前頼んだ手紙の清書でも同じような不可解なことが起きていたようじゃないか！」

kは怒って原稿を机の上に叩きつけると、興奮のあまり咳き込んでしまった。ジェニーはさっと原稿を取り上げると、続きを読み始めた。「ジェニーはジェニーである。つまり自己自身が自己を権威づけるとすれば、臣下であるkやフレデリックの承認がなくともこの私は皆の王だ」。

「やめろ！やめたまえ。また、例の、オセンチなワニが書いたんだなんて訳の分からない言葉で弁解するつもりなんだろうけど、君の妄想はもうたくさんだ。僕の癖字や綴りの間違いを直してきれいに清書するのが君の役目であって、文を作り

「変えてくれとは頼んだことはないよ。」と激しい抗議の口調となった。信じられない、というふうに何度も首を振ったkは、君のばかな書き込みのせいで僕の原稿は全部ゴミ箱行きだ、と嘆き、とんだ恐慌の始まりだ、と呪いのような言葉を放った。

kをなだめようとその肩にそっと手をまわしてジェニーは言った。「身体、財産、魂のすべてを捧げているこのわたしこそが、あなたのほんとうの理解者なのよ・・・わたしはあなたが書いたものを忠実にただ書き取っているだけ。決して、何も変えてはいやしない。決して・・・」それから、耳元に口を寄せてつぶやいた。「あなた、まだ分からなくて？本当に、本当に分からなくて？その文は・・・あなた自身が書いた文なのよ。私が書いたんじゃないの、本当にあなたが書いた文なのよ」と。

さて、ジェニーは、エンゲルスがマルクスの言葉を自分に都合がいいように勝手に解釈して恣意的な編集を行っている、と疑っている。このジェニーの疑いがどのような認識上の帰結をもたらすか、ということについて考えてみよう。

まず、マルクスのオリジナルの原稿とエンゲルスの翻訳の関係をみてみると、エンゲルスの視点からは、マルクスがドイツ語で書いたオリジナルのテキストは自分が行った英語訳と全く同一でなければならない。しかし、ジェニーの視点からみると、それらの間には必ずしも完全な対応があるようにはみえない。ジェニーの目には、エンゲルスは互いに異質なものを同一化しようとする幻想、つまり、自分がマルクスになるような狂気に陥っているようにみえるのである。エンゲルスは、共通項なき相異なる項aとbを、商品a=商品bのような等価式で結ぶ、というパラノイア的な判断に囚われている、ということになる。

次に、マルクスの原稿とジェニーの清書の関係についてみてみよう。エンゲルスは、ジェニーがマルクスの言葉を自分に都合がいいように勝手に解釈している、つまり、落書きやサインだけでなく、マルクスの言葉の代わりに自分の言葉を勝手に書き込んでいる、と疑っている。しかし、ジェニーの眼からみると、マルクスがドイツ語で書いたオリジナルのテキストは自分が清書したドイツ語の原稿と全く同じでなければならないし、それらは同一である、と確信している。よって、オリジナルのテキスト（エンゲルスは読めない）と清書されたドイツ語の原稿との間には必ずしも信頼に値するような対応がない、とするエンゲルスを、ジェニーの立場に立って観察すると、エンゲルスは同一なものを互いに異質であると主張しているようにみえる。つまり、つまり、エンゲルスは、同一の項であるaとbを、商品a≠商品bという不等価式で関係づける、という分裂的分析を行なっているのである。

こうして、ジェニーの視野は、シンメトリーである等価式とアシンメトリーである不等価式との両方を見渡している。この視野こそ、「資本論」のエッセンスに他ならない。（ちなみに、エイゼンシュタインが「資本論」を映画化する構想を持っていたことは知られているが、彼の編集の概念、すなわち、フィルムを解体し異化的同化を行なうことは、「資本論」のエッセンスに対応している。フィルムの解体と異化作用は、ジェニーが捕らえた二つの側面、つまり、同一のものを二つにする視点と、異質なものを同一にする視点と同様である、と解釈できるのである）。

さて、ブルジョア言語学は、「話す－聞く」というシンメトリーな交換関係（a=bであり、b=aでもある）を前提としているが、これは本質的に、供給が需要をつくる、つまり、売ることは買うことに等しい、とする「セーの法則」の言語学であるといえる。

ジェニーおよび母親の声は、エンゲルスという解釈者と翻訳者の中に搾取されてしまったように、「話す者」の痕跡は「聞く者」の中に必然として消し去られてしまう。小説で描かれたジェニーとマルクス、エンゲルスの関係は、結局、このようなヴィクトリア朝の中立的な空間の本質を表現しているのである。オーウェルの妻の場合と同様、ジェニーはブルジョア作家マルクスに雇われた労働力商品という性格を持ったが、そこではマルクスのオリジナルな言葉を「聞く」という役割しか与えられられず、マルクスのオリジナルな言葉を「話す」ことだけしかできないのである。こうして、ブルジョア言語学と経済学は、ジェニーの解釈を創造したい欲望を完全に無視してしまう。言語学が対象とする「話す－聞く」という関係は、経済学が対象とするシンメトリーな交換関係（a=bであり、b=aでもある）と置き換えることが可能である、とマルクスは見抜いていた。つまり、フーコーが述べたように、言語学と古典経済学とは、同一の軌道を回る言説なのである。この洞察によって、マルクス

は「話す」の項を「商品」とみなすことができたのである。

マルクスは「資本論」の冒頭で、共通項なき「商品」と「商品」とが相対し合う空間を描写することから始めた。そこで、「商品」と「商品」は対峙しているにもかかわらず、互いに関係を打ち立てることができない。例えば、「リンネル商品」と「鉄商品」は、一望監視方式監獄のなかで孤立した囚人達が互いに視線を交換できないように、その間に関係を打ち立てることができない。諸商品の間には社会的相互作用が存在しないのである。つまり、そこには、皆が生存するために必要と考える相互援助の知的且つ文化的な関係を見出すことができない。マルクスは、諸商品間の交換関係を表す等価式の列を示すが、それらは、分割したり、排除する思考の効率的な抽象に過ぎない。これは、表象における全体主義である。こうして、マルクスは「資本論」冒頭で、このようなシンメトリーな表象空間を提示することによって、人々が情報の客体となってもコミュニケーションの主体となることのできない中立的な空間を表現しようとした、ことに疑問の余地はないのである。

プルドンは、構成的理念であった「セーの法則」の限界を批判的に検討して、交換不可能な非対称的關係を明らかにし、後にケインズが理論化した有効需要の視点を先取りしていた。プルドンがこのような視点を持っていたという事実は単なる偶然ではない。プルドンを始めとするアナキスト達は、知的で文化的な互酬関係、すなわち依存関係を本質とする社会的援助の意義を最も重視していたから、例えば、供給と需要の関係を、経済の領域における相互に依存し合った非対称的な関係、としてリアルに捉えることができたのである（この場合、「リアル」という言葉は、「理念的」という言葉で置き換えることができる）。ここで「セーの法則」を検討してみると、「売る立場」と「買う立場」の関係を「構成的」に捉えて、つまり、シンメトリーな交換関係として把握している。このシンメトリーな交換関係のもとに、「売る立場」の項のなかに「買う立場」の項がいつでも同一化されてしまう危険が生じるのだ。こうして、結局、「セーの法則」に従う場合、「売る立場」の他には何も存在しなくなってしまう。もしそうだとすると、認識の経済は理論上成立するが、「セーの法則」に従った現実の経済は破綻してしまうであろう。他方、「売る立場」と「買う立場」の関係を「統整的」に捉えようとする、両者の関係は今述べたようにシンメトリーの関係として還元することはできない。非対称的な交換関係であるから、「売る立場」の項のなかに、「買う立場」の項が完全に消去してしまうことは起こらない。